



華やかなオペルンバル

## 舞踏会のシーズン

ナポレオン戦争後、ヨーロッパの国際秩序再建を目的として1814年にウィーンで開催された国際会議の時すでに「会議は踊る」

などと陰口を叩かれたほど、ウィーンと舞踏会とは切っても切れない縁があるようだ。

ウィーンはソ連を筆頭とする東欧諸国の自由化にともなって、地理的にもヨーロッパの中心としての魅力を持つ都市となってきた。それでもオーストリアは経済的にはまだ小国だ。その昔、この国がハプスブルク家の支配する広大な帝国として栄えていた時代、ウィーンは帝国の首都として交易

のみならず、さまざまな文化交流の中心地だった。

ここにたくさんのお音楽家が集まったのも、こんな背景があったからだし、異質の文化がそれぞれ融合したり刺激を与えあったりしながら発展・醗酵する興味ある土地には、それだけ文化や芸術に対する理解の深い人も多かった。

「文化」というと何か難しそうに聞こえるが、何もしかつめらしく難解なものばかりが文化ではな

い。ファッションもそうだし、料理も文化だ。そういえばウィーンには美味しいものがたくさんある。中でも各種のケーキやデザートは世界的に有名だ。魚料理だけはまわりが海に囲まれていないだけにちよつといただけないが……

音楽に話を限ってみよう。哲学的な音楽にも深い味わいがあるが、ヨハン・シュトラウスのワルツ、これだって立派な音楽だ。何ととっても楽しい。「悲しみや悩みなんてきれいさっぱり忘れてしまつて、皆で華やかに楽しもうじゃないか！」と思う人間は少なくないようで、そのためにこそ「舞踏会」が存在するのだ。

毎年11月11日午前11時11分11秒にカーニバル(謝肉祭)が始まり、この興奮はクリスマスまで頂点を迎える。その後春先の復活祭前まではカトリックの生活リズムから見ておおっぴらに騒いでもよい時期となり、したがつて舞踏会は1月から2月中旬までがそのメインシーズンである。

ウィーンでは毎年このシーズン中に大小合わせて数百回におよぶ舞踏会が催されている。

舞踏会にもいくつかの種類がある。覆面や変わったコスチュームで変装して出かけていく「マスケ

ンバル(仮面舞踏会)」や、男女とも最高の夜会服で着飾つて出かけるエレガントなもの、その他特にからびやかな宮殿やホテルなどではなく、家庭で親しい友人同志と子供も交えて楽しむ「ファッシング・パーティー」など、その趣向は尽きるところがない。

ウィーンならではのとびきりハイクラスの舞踏会は国立歌劇場で行われる「オペルンバル」とムジークフェラインで行われる「フィルハーモニカーバル」だろう。

このような格式の高い舞踏会は夜10時にならないと始まらない。オープニングでは「社交界にデビューする」若者がペアでワルツを披露する。女性はういういしく純白のイブニングドレス、男性は燕尾服に身をかため、目に眩しいほど華やかなセレモニーとなる。社交界そのものがあやふやになつてしまった今日では、このオープニングに出場したい人を選抜するためのオーディションが行われる。デビューに適した若さも必要だが、第一にワルツが上手に踊れ、それも普通の右回り、そしてより難しい左回り両方のステップとも巧みにこなせなくてはパスできない。

オープニングのあとは自由に飲んだり、踊ったり、軽食をつま

んだりしながら、知人と談笑を楽しむ。時のたつのを忘れて明け方4時、5時まで会場にいることもザラである。踊りは別にソシアルダンスやワルツばかりでなく、大きな会場ではディスコのフロアーもある。かなり高価な賞品が当たる籤引きがあつたり、ルーレットも楽しめたり、とにかく普段の生活の影を忘れられるような仕組みになつている。

この体力的にもかなりのものを要求される享楽(徹夜をしても週末でないかぎり普通の人は翌日また働かなくてはならない)のお値段はそれこそ千差万別だが、安いもので入場料が数千円、前述の本格的な舞踏会ではひとり数万円となる。

それに加えて夜を徹しての立ちづくめ・踊りづくめに耐える自信のない人は、飲食や談笑にも使える椅子席を予約するわけだが、これ一席あたりさらに最低数千円を支払わなくてはならない。

聞くところによると、オペルンバルのボックス席のテーブルひとつをまるまる予約するには(数人しか座れない小さなテーブルである)百万円近くかかるそう。食べ物、飲み物その他はもちろん別会計での話である。念のため。



変装や覆面で踊る仮面舞踏会



入場者を次々と紹介